

## 漫画家の誠意

### 図書館係 阿部健治

『文豪ストレイドッグス』（「ストレイドッグス」は「野良犬」という意味のようだ）という漫画が人気らしい。文豪（中島敦・芥川龍之介・太宰治ら、教科書でもお馴染みの人たち）がイケメンキャラクターとして登場し、探偵とその敵側に分かれて戦うという内容で、更にそこから小説版も出ている。

その小説版の『文豪ストレイドッグス』の第1巻を読んだが、そこでかなりの活躍を見せているのが「太宰治」だ。太宰は未遂も含め3回も心中した「死にたがりのモテ男」だから、とても使いやすいキャラクターなのだ。話の展開もスピード感があり、アクション物として面白く読んだ。作者の「朝霧カフカ」は文豪たちについてもかなりの教養があり、文章も悪くないので十分鑑賞に堪える。こういうところから「文学」に親しんでいく、というのもアリなのだろう。

太宰治はとにかく人気のある作家である。特に作家筋から取り上げられることが多い。2003年に『蹴りたい背中』で芥川賞を受賞（19歳最年少）した綿矢りさは小説を書き始めたきっかけとして「高校生のときに太宰治に感銘を受けて全集を読んだこと」を挙げているし、結婚、出産をへた2017年には太宰の自分への影響について聞かれて、「すごく太宰が好きだったので、こんなこと言ったりやったりしたら、太宰が怒るかなって…。今では太宰が注意してくることもだいぶ減りましたけど（笑）。」と答えている。

また、2015年に悩み苦しむ芸人の姿を描いた『火花』で芥川賞を受賞した又吉直樹は中学生時代、太宰治に衝撃を受けたと言う。

「太宰って共感させる力がムチャクチャ強いんですよ。なんでおれしか知らんことを書いてんだろう、と。あと、物語を破壊することとか、物語がどんどんひっくり返って、どれがほんまなんかいな、みたいな構造になっていることとか、小説家としての発想にも驚かされる。哀愁もあって、何より笑えるし。太宰ショックと相前後してダウンタウンさんを見たときも、ぼくは同じような衝撃を受けましたね。ダウンタウンさんと太宰は似ている！ と。共感力もそうですが、太宰が小説でやっているようなことをダウンタウンさんは毎週コントの中でやっていた。それがテレビで見られた。ダウンタウンさんには思春期の頃、とんでもない影響を受けたと思います。」

太宰の小説は文学好きの青少年たちを「作家」にしてしまうほどの起爆力を持っているのだ。

熱烈な太宰ファンは漫画家の中にもいる。障害者を描いた『どんぐりの家』で第24回（1995）日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した山本おさむがその人だ。筆者は、その山本の『津軽一太宰治短編集』に古書店で偶然出会い（要するに立ち読みだ!）、太宰に対する熱い思いに深く打たれた。

太宰には、「自分の人生・生活が読者によく知られている（退廃的で、自殺未遂や心中未遂を何度もしている）」ことを利用した作品群がある。例えば、『道化の華』（のちに『人間失格』に発展した作品）や『富嶽百景』、『津軽』などがそれだ。後二者は教科書にもよく採られているので、我々にも全国の高校生にも馴染み深い作品なのだが、山本は研究者なみに太宰のことを調べていて、例えば『富嶽百景』など、作品を読んだだけでは知り得ないことまで補って漫画を描いている。筆者はなるほど、と書店で思わず声を挙げそうになった。

また、『津軽一太宰治短編集』には「カチカチ山」という作品も載せられている。昔話を太宰が改作した作品で、**若い女性の残酷さ**をあますことなく描いており、我々男性陣を震え上がらせた（あなたたちの中にもこういう面ありませんか？自分を見つめるためにも是非読んでください）のだが、漫画ではこの作品にまで、太宰はこういう状況で描いたという山本の解釈がついているのだ。それがいちいち頷かせる内容で本当に感心させられた。筆者はここに、山本の、**作品や作家の奥の奥まで知りたい**という欲望をはっきりと感じた（たぶんこれは綿矢や又吉にもあるだろう）。

筆者はこれを山本の太宰に対する「誠意」と呼んでみたい。山本は明らかに売れる漫画ではなくて、描きたい漫画を描いている（実際、『津軽一太宰治短編集』は商業ベースから外れかけたらしい。よくぞ出版されたものだ）。紙幅が尽きてきたので詳しくは書けないが、「谷ロジロー」（『孤独のグルメ』が有名）の『「坊ちゃん」の時代』や「みなもと太郎」の『風雲児たち』（長大な作品なので番外編の『蘭学事始』だけでも読んでほしい）にもそれがあるし、手塚治虫の『火の鳥』（『スターウォーズ』にも匹敵する大河漫画。新版を足女図書館にも入れた）にもそれがある。足女生には是非こういうものを手にとってもらいたいと願っている。

2年2組 澤井遙香さん 画